

〈論文〉

Jonah's Gourd Vine における Hurston の自己探求

志 水 智 子

Abstract

Zora Neale Hurston fictionalized her parents' life stories to express her view on African American society and universal human nature in *Jonah's Gourd Vine* (1934). The hero, John Buddy Pearson, is an African American whose real father is a white master of a plantation. John makes his mark as a popular preacher in the black church but his sexual debauchery is self-destructive. Like Jonah who is endowed with a protective "Gourd Vine" by God in the Bible, John is blessed with a rich blood father, a clever wife and his speech talent. However, John never stays where he achieves one success, and destroys what he was given by his supporters. John's destructive tendency suggests universal human consciousness to deny his "Gourd Vine" and to desire successive changes.

John is helped by Christianity and is injured by Voodoo under Hattie's curse. However, John never reveals Hattie's disgraceful deeds in the court just because he doesn't want to speak ill of the African American society to which he thinks he also belongs. John embodies Hurston's affectionate feelings for her roots and African American society even when she rebelled against them. By describing John's life, Hurston tried to search her fluctuating feelings on African American society as well as create a story of universal human growth.

序

Zora Neale Hurston の *Jonah's Gourd Vine* (1934) は、Hurston の

両親の人生をモデルにしている作品ではあるが¹、この中で Hurston は人種や民族、普遍的な人間の資質についての彼女の見解を表明するための媒体として、自身のルーツを象徴する、両親の人生を虚構化することを試みている。主人公の John Buddy Pearson は、白人の農園主とそこで働く黒人女性との間に生まれた混血の私生児であり、肌の色が薄い黒人として生まれ育つ。この作品においては、白人社会と対峙する黒人の生きざまも描かれるが、人種間の力学を発端として生を受けた黒人男性の人生を描きながら、人種問題を超えた普遍的な人間の本質もまた同時に追求される²。John の人生に付きまとう対立要素の混在性が彼にどのような影響を与えているかを読み込んでいくと、Hurston 自身の民族や宗教といった文脈におけるアイデンティティーの探求の試みがうかがえるのである。

この作品のタイトルはメタフォリックな意味を持っており、John の生き方を示唆している。Jonah と Gourd Vine についての聖書におけるエピソードは、人間が労することなく与えられた休息のための木陰を、それを与えてくれた同じ神が奪ってしまい、それに対して Jonah が抗議をするというものである。神は Jonah の抗議に対してこのたとえを説明し、苦勞することなく得られたものでさえ失うのが惜しいのなら、苦心して生み出したものを失うのはもっと辛いものであることが分かるであろうといった教示を与える。この作品において Jonah に相当するのは John であり、“gourd vine” は John を守り恩恵を与えてくれる人々や環境、与えられた幸運を表す。John は実にさまざまな社会的家庭的幸運に恵まれるが、彼自身の行いが原因となってそれらの幸運を損なう。本稿では彼にとっての“gourd vine”となるものとそれらが失われることの意味をたどりつつ、John のアフリカ系アメリカ人としてのアイデンティティーがこの作品を通じていかに表現されているかを検証していきたい。John の人生によって、Hurston 自身が持つ民族意識や信仰観、彼女が人間の成長において不可避であると考えた経験もまた表現されているのである。

I

John は農園労働者として、また、鉄道敷設の労働者として、さらには大工として働く時期もあるが、彼に社会的地位を与えその才能を発揮する喜びを与えたのは黒人キリスト教会での説教師としての生業である。E. Franklin Frazier は、奴隷を会衆とした黒人説教師に必要であった資質の一つを、“the ability to sing” (25) であったと述べ、感動的な熱弁ができた説教師が才能を発揮したことを示唆しているが、この考えに沿ってみると John の声の良さや演技力は彼の職業に有利であったと言える。教会で祈りの言葉を述べた際、“he got uh good strainin’ voice” (89) と Deacon Moss から称賛された John はドラマチックに説教を演ずる才能があるが、彼自身は禁欲的でもなければ敬虔に信仰を求めるわけでもない。この章では、このような黒人キリスト教会における John の生き方が意味するものについて考察する。

作者 Hurston は John と同じく黒人キリスト教会の説教師を務める父を持ち、教会という世界の内部者として教会行事にかかわりながら育った。自伝である *Dust Tracks on a Road* (1942) において Hurston は、説教師の娘ではあるが無条件に敬虔であるわけでも奇跡を心から信じているわけでもないことを述べている。John の人気は、Hurston 自身の “I was moved, not by the spirit, but by action, more or less dramatic”

(*Dust Tracks on a Road* 756) と述べられる思い出から考案された可能性がある。Hurston が子供のころに最も好きであった教会行事は「リバイバル集会」(revival meetings) であったと記されるが、*Jonah's Gourd Vine* においても John がリバイバル集会で説教を行い、人々の心をとらえる様子が描かれている。その反面、John がキリスト教を頼りに自らの抱える問題を解決しようとするのも精神的な向上を図ろうとする様子も一切描かれない。John は弁舌の才能を称賛される反面、精神的に弱く、その私生

活がとりわけ俗っぽく描かれることで、彼の力強い言葉と脆弱な精神の乖離が強調されるのである。Frazier がその著書で “Very often the churches had to tolerate or accommodate themselves to sexual irregularities.” (40) と述べているように、白人キリスト教会に比べて黒人キリスト教会は教会員の放縦な性行動や世俗的な欲に対してはかなり寛容であった。このため、John は聖職者というより演技者であったとしても黒人キリスト教会を中心とする共同社会をまとめるには十分な資質があったと考えられる。

また Frazier によると、黒人キリスト教会の役割は、奴隷や黒人の苦しみに対してキリスト教の文脈での救済を説き、黒人社会に連帯感や “social solidarity” (16) を与えることであったとされる。John の説教は自らの世俗的欲求と社会的地位の獲得のためであるのに、アフリカ系アメリカ人社会に民族としての結束観を与えるために活用されている。例えば John が妻である Lucy に Big 'Oman との浮気を許してほしいと頼んでいる時期には、彼は会衆に対し、“You are de same God, Ah Dat heard de sinner man cry.” (88) という言葉から始まる祈りを披露するが、この演説における「神」は John の中では浮気を許してくれる Lucy に相当し、彼は神の名を語って自身の世俗的な問題を解決しようとしているにすぎない。それでも彼の言葉だけを聞いた教会の幹部たちは、“Dat boy got plenty fire in 'im ... Les' make 'im pray uh lot.” (89) と彼の言葉の力をキリスト教信仰の理解者としての彼の水準と同一視するという誤りを犯すのである。しかも彼は黒人教会の会衆が求めるアフリカ性を説教に加えることで、共同社会の連帯感を高めるという、黒人教会に求められる社会的役割も果たしている。この様子は、“He rolled his African drum up to the altar, and called his Congo Gods by Christian names.” (89) と描かれる。このように彼の説教は彼個人の人格からは乖離したところで黒人社会の需要に十分こたえられるゆえに彼は深い信仰にはかかわらないまま聖職者としての名

声を得るのである。Robert E. Hemenway によると24章において、John が神の物語を語る説教は、Hurston のフィールドノートから一字一句書き抜かれたものであり、1929年5月3日に C. C. Lovelace という牧師から彼女が聞き取ったものである³。このため物語の流れにおいては唐突で冗長すぎる説教ではあるが、詩的で音楽性にあふれ、John が「演技者」であることを強調する効果がある。

John がアフリカ系アメリカ人独自の宗教文化に助けられていくことには意味がある。Robert T. Newbold, Jr が編集した1960年代以降の黒人教会説教集にみられる黒人キリスト教会の説教師たちの話題においては、アフリカ系アメリカ人たちのルーツとなるアフリカ性に対する誇りや、アメリカ社会における人種問題、黒人や黒人女性の社会的地位向上の奨励といった社会問題が扱われ、すでに様々な階級や立場にあるアフリカ系アメリカ人にとって結束観をもたらす話題が選ばれていることが読み取れる。例えば John と同じくバプテスト教会牧師を経験したことのある Thelma Davidson Adair は、黒人女性の地位の向上を訴えている。人種問題を扱う例としては、Henry Bradford, Jr. は、Martin Luther King の生き方に言及し、人種問題を解決するために黒人側のできる努力を説く。さらにやはりバプテスト派の牧師経験を持つ Shelby Rooks は、“Sins of the Fathers” と題された説教で、歴史における先祖たちの行いの責任を現代における人間が免れることができないことを認め、人種問題に取り組むべきだと説いている。黒人キリスト教会とは、民族の連帯意識を想起させつつ、アフリカ系アメリカ人にとっての課題をキリスト教の文脈の中で表現する、アフリカ系アメリカ人独自の文化であると言える。これが、アフリカ人でもなく白人でもない、アメリカにおける独自の民族集団にアイデンティティーをもたらしている。そして John の自己実現はアフリカ系アメリカ人の文化によって成し遂げられ、またその文化の担い手であることが彼の幸福を継続させることは、象徴的に Hurston が考えるアフリカ系アメリカ人の自己実現に必要な条件を示唆し

ている。

また、John は熱心な信者ではなく、信仰の「外部」で生きるはずなのだが、結局は常にキリスト教の文脈の「内部」において彼が救われ続ける様子が描かれることの意味について考えたい。この作品の中では人々の信仰対象として、キリスト教とともにフドゥー教と思しき呪術師のまじないの経緯が描かれる。そして明らかにキリスト教が彼の人生を助け、フドゥーらしき民間信仰が彼の人生を損なっている点は示唆的である。学校の友人として John が出会うことになる Lucy が蛇を怖がり、John がその蛇を退治して彼女の心をつかむ場面では、キリスト教の文脈における悪である、神に対する裏切りへの誘惑を減することが John に幸福と喜びをもたらす様子がメタフォリックに描かれる。また Hurston の著書 *Tell My Horse* (1938) では、ハイチの神々の長である Damballah Ouedo は蛇を印として持つことがハイチにおける Hurston のフドゥー信仰の調査結果として描かれている。フドゥーの文脈において本作品を読み解くならば、John はフドゥーにおける神を拒否し、Lucy の信頼を得ていることが分かる。Lucy と手紙を交換し、ともに歌を歌い、互いへの愛情を深めるのはキリスト教会においてであり、John に自己実現の機会と収入を与えるのもキリスト教会である。このようにキリスト教は John の恋愛や結婚、社会的成功を助け彼に幸福をもたらしている。

一方、John の浮気相手であった Hattie が呪いの儀式を行った場面の直後に Lucy が病気になる様子が描かれることから、Hattie の呪いが効力を持っていることが読み取れる。Hurston は *Mules and Men* (1935) の中で、フドゥーの呪術師が実際に男女を別れさせたり人の死を招いたりする儀式を目撃した様子を記しているが、まさに Hattie は動物の死骸などのフドゥーの儀式に使われる道具を家の周囲に埋めている。John にとって Lucy との絆がキリスト教的である一方、Hattie との絆はフドゥー的なものであり、象徴的に Lucy は John を助け、Hattie は彼を傷つける。フー

ドゥーを思わせる民間信仰は臨終の Lucy をも傷つける。Lucy が娘 Isis に自分の臨終の際に、枕を取り除けたり鏡を覆ったりしないようにと頼む場面には、Hurston 自身の母の願いを叶えてやれなかった思い出が再現されて描かれる。このように黒人キリスト教会とキリスト教は、いくら John が信仰の外部にいてそのありがたみを理解していなかったとしても彼の “gourd vine” となって彼を手助けしており、彼が生涯キリスト教的な “gourd vine” に守られ、説教師として人生を終えている描写によって、彼は意図せずとも結局キリスト教の「内部者」として自己実現を図り、幸福を与えられていたと言えるのである。

II

John は様々な人々に助けられてその社会的地位や物質的精神的幸福を手に入れている。そこで次に John を上昇させる、彼にとっての “gourd vine” となる人物たちの存在が意味することについて考察する。

まず最初に John に仕事と教育を受けるチャンスを与えるのが、彼の白人の実父である Alf Pearson であり、彼は John にとって一定の生活水準と社会的安定を提供してくれる人生におけるセーフティーネットとなる。Pearson から学校に行かせてもらえたことで、John は身ざれいにすることと教養を身に付けることを知り、演説の才能を開花させ、さらに彼の伴侶となって彼を支える、次なる彼の “gourd vine” となる Lucy の愛を勝ち得ることになる。John を守り育てる Pearson が白人であることが示唆するのは、人種の壁や人種差別が John の上昇を阻む主たる原因にはなっていないということである。Hurston 自身も多くの白人の知人の助けを借りて育ち、学業を遂行しているため、人種集団としての白人に対する批判の意志は持ち合わせておらず、彼女は John の人生を借りて白人への反感を描いてはいない。むしろ John の幸福や成功を阻むものは同じ人種である黒人たちの羨望や憎しみ、アフリカ性を象徴する民間信仰、さらには彼自身である。Hurston

は John の躰きを描くことを通して、アフリカ系アメリカ人社会が抱える階級分断の問題の方を描き出していくのである。

さらに John の妻となる Lucy は、度重なる John の浮気や弱さに何度も傷つけられながらも、彼を常に守り、彼のキリスト教的な倫理意識を高める役割を担う。例えば John が放埒な生活が過ぎたゆえに教会会衆の信頼を失い、牧師としての地位が危うくなった際に Lucy は、会衆に対して反省の気持ちを伝えるように彼に促す。彼女の叱咤のおかげで John のスピーチは会衆の心を再びつかみ、John は説教師としての地位を守ることができるのである。Lucy は家庭を持つてからの John を守る “gourd vine” となるのだが、John は Lucy が近い存在になればなるほどそのありがたみを忘れ、浮気相手の方に引き付けられ、ついには Lucy を殴ることで自ら神の恵みを損なう。Lucy は自分が病気になっても John に対して “Don’t git miss-put on yo’ road.”、“Youse livin’ dirty and Ahm goin’ tuh tell you ’bout it.”(128) と警告する。

Lucy が John を叱咤する際に口にする「神」とは、彼女が抱く正義感と倫理基準を表す。末娘の Isis がチフスにかかり生死をさまよう際に、John は娘を見守るのが怖くなり、Lucy を手助けすることもなく浮気相手のもとに逃げてしまう。彼の様子は “So John fled to Tampa away from God”

(117) と描かれる。ここでは John は Lucy の考えるキリスト教倫理と正しさの基準から逸脱し、Lucy によって保証された救いが与えられる生き方から離れようとしているのである。しかし John は結局 Lucy を頼りたくなり彼女のもとに帰る。このように John が会衆の信頼を失いそうになった時や浮気相手のもとに逃げる時、彼を自分が考えるところの「正しい」生き方へと引きもどす Lucy は、John の心のよりどころであり、John は Lucy を介してキリスト教徒としての倫理規範をすすんで自らに課すのである。そのため、Lucy を失った直後の John は解放感を覚えるものの、後妻となった Hattie と Lucy を比較しては Lucy を恋しく思い、生気を失っていく。

Hattie との離婚裁判の際には、“No fiery little Lucy here, thrusting her frailty between him and trouble.” (165) と述懐し、Lucy はもういないことをしみじみと感じる。すぐそばにいた時には彼が傷つけていた Lucy は、失われて初めて彼を守り彼を支える “gourd vine” であったことが実感される。

Lucy という “gourd vine” を自ら損ない、損なってすぐにそのありがたみを思ってから後悔する John は弱く信仰の浅い人間であるが、そんな彼を支えてくれる女性である Sally がすぐに現れることは、John が自分の意思と関係なくキリスト教的恩恵の受益者であり、生涯神の恵みに包まれていることを示唆する。この様子は、“He had prayed for Lucy’s return and God had answered with Sally.” (200) と描かれ、John が常に人や環境に恵まれることが示唆される。Sally は晩年の John を守り、彼を説教師として復職させる道を開き、文字通り、神のもとに彼を連れ戻す。また Sally は Lucy よりも盤石な収入源を持つ経済力のある女性であり、打ちひしがれていた John にはまたしても “gourd vine” が与えられるのである。Sally の計らいでリバイバル集会 (revival meetings) において説教をする事になり、Pilgrim Rest Baptist 教会での牧師職を頼まれることになった John の心境は、“Felt lak Samson when his hair begin tuh grow out again.” (189) とキリスト教的文脈において描かれ、彼が再び神の恵みの届く内で生き始めたことが示唆される。Ora Patton という少女からの強引な誘惑によって John が彼女と性的な関係を持ってしまい、結局 Sally への貞節を貫くことができず、またしても “gourd vine” を損なうかのように描かれる場面において、John の死を悼む Sally は、John の過ちなどものともせず、彼を深く愛している様子が描かれる。John は最後まで、彼を守る Sally という “gourd vine” を失うことなく人生を終えるのである。Sally が体現する “gourd vine” は、John の心の弱さとは対照的な、恵まれた環境と他者からの恩恵、黒人キリスト教会の恩恵に内包された John の人生を

示唆する。

また“gourd vine”を体現する、実父 Pearson、妻 Lucy、そして晩年の彼を支える Sally らの恩恵を損ないがちな John の人生が示唆するのは、与えられた幸運や安定した状況に対するありがたみはそれを強く意識しない限りはすぐに薄れ、人間は次なる変化を、たとえそれが与えられた恩恵を損ない後悔することになるとしても、求めてしまうということである。つまり他者からの庇護によって与えられた安定というものは、破られる運命にあるというのが、John の人生を通して Hurston が示すメッセージであると言える。勞せずに関与に与えられた恩恵や庇護を損なうことは人間の弱さであるというよりは、人生において不可避の経験であり、“gourd vine”は自らに必要な物事を見出す過程での試金石のようなものである。このような他者から与えられる恩恵や庇護の意味は、例えば Hurston の代表作、*Their Eyes Were Watching God* (1937) におけるヒロイン Janie にとって、彼女を守ろうとした祖母が押し付けてきた結婚相手や生き方が損なうべき“gourd vine”であることにおいても見出せる。John の場合は自分に与えられた“gourd vine”を再評価することができるようになったことで彼は黒人キリスト教会の恩恵に内包される人生を全うする。そして John の人生によって、Hurston 自身に内在する、彼女のルーツとなった黒人キリスト教会とそこで得られた信仰への信頼の意識が垣間見られるのである。

III

John はその人生において多くのハイブリッドな価値観を体現する人物であり、この作品においては、対立する概念や価値観が混在して描かれている。彼は強さと弱さ、聖と俗、フッドゥーとキリスト教、黒人の家族と白人の父、“gourd vine”とそれを損なう虫を象徴する出来事、といった対立する要素を併せ持つのである。また両親の人生を虚構化した John と Lucy の人生を描く設定そのものが、作者 Hurston の、自分の人生観の基礎を育んだ世

代の生き方と、それを再評価していく自分との違いを相対的にとらえる視点の存在を示唆していると考えられる。そこでこの章では、John を取り巻く対立する要素が意味することについて考察していく。

John は文字通り、白人の父と黒人の母のハイブリッドであり、白人の父から物質的成功に必要な生活基盤や教育の機会を得、黒人キリスト教会からは社会的地位を得ている。また彼は体力があり説教師としての能力も高いが、欲望に訴える誘惑に対しては極めて弱く、聖職につきながら俗世の誘惑によって失敗することから生涯免れない。彼の生活には聖と俗の概念が両輪のように付きまとい、彼は教会の意味を俗化する役割を果たしながら、キリスト教の文脈における“gourd vine”に生涯恵まれ助けられるという意味において結局は聖なる力に守られる「内部者」であることが示唆される。つまり、John は白人社会や信仰からの「外部者」であるように見えて結局はそれに守られ、その「内部」にいる様子が明らかになっていく。Hurston 自身もその人生において白人の知人からの恩恵を感じていたゆえに、彼女の作品を白人への抗議文学とすることはなかったが、そうかといって人種の問題が意識されないわけではない。白人由来の文化の内にあることを認めながら、さらに黒人社会の内部に目を向け、アフリカ系アメリカ人の自己実現方法を追求する Hurston の意識がこの作品には表れている。

またこの作品においてはアメリカの北部と南部との対比も描かれる。北部が物質主義と進歩、人々の流動性と新たな人種観や階級のハイブリディティを表すのに対し、南部は経済の停滞と閉鎖性、伝統的な人種のハイブリディティの存続を表象する。John は南部の黒人たちの町でその地位を築き、黒人キリスト教会というアフリカ系アメリカ人独自のハイブリッドな宗教の中で自己実現を図る。John の暮らす南部社会の文化がふんだんにストーリーに絡められることで、黒人社会に共通する奴隷時代の苦労の原体験を核にゆるやかに求心性を持つアフリカ系アメリカ人文化の存在が浮かび上がる。例えば Alf Pearson の農場で綿摘みを終えた使用人たちのためにバーベキュー

大会が催されるシーンは、奴隷制時代の白人主人が同じ家に住む奴隷たちをねぎらう状況そのものである。そこで使用人たちが手拍子をしながら踊る様子は以下のように描かれる。

So they danced. They called for the instrument that they had brought to America in their skins — the drum — and they played upon it. With their hands they played upon the little dance drums of Africa. (29)

ここで言及される“drum”とは、黒人の使用人たちのリズム感であり、自分たちに科された苦難に立ち向かおうとする民族としての意志の表象である。John は、人々が地域の連帯性を離れて物質的豊かさを基準に新たなヒエラルキーを築く北部の事情とは対照的な、黒人の原体験と地域性を有する南部において生きるのである。

そして John にとっての Hattie は、自分の共有する文化ではあるが共感することはできないアフリカ性に対するアフリカ系アメリカ人の意識を象徴する要素として描かれている。John は Hattie との離婚に際して裁判を経験するが、知人に対して彼のために Hattie の劣悪な性格や言動を暴き立て証言してほしいとは望まない。そのようなことをすれば白人裁判官に黒人女性の醜悪なふるまいの一例を披露することになり、黒人女性のみならず、黒人社会全体の印象を悪くする可能性があることを John は恐れるのである。つまり John は自らも属する民族集団の評判を下げたくないという理由で、Hattie の醜態を裁判で暴露することを避け、自分の個人としての利益よりも黒人社会と民族の誇りを優先する。たとえ Hattie への愛情が冷めていようが、John は彼女の中に自分が帰属している民族性への誇りや恥、連帯意識を感じないわけにはいかない。John のこのような意識からはアフリカ系アメリカ人に呪縛のように付きまとう同胞意識が読み取れるのである。こうし

て John は自身がキリスト教の信仰から遠ざかる時にも結局は黒人キリスト教会やキリスト教に守られてその内におり、フードゥーの呪術を用いる Hattie との夫婦関係を解消しても彼女と共有する民族性の内にいる。John が体現するのは、白人にルーツを持つキリスト教、アフリカ性を持つフードゥー、そしてアフリカ系アメリカ人独自の黒人キリスト教の文化をいずれも内包しているという矛盾を抱えながら自己実現を図ろうとするアフリカ系アメリカ人の試行錯誤と考えられる。

さらに、John と Lucy が表象する Hurston の「両親」は、確かに Hurston の価値観の形成を助けたルーツであり、彼女が共有する価値観の一つである。それを再評価しながらそれとは異なる価値観を形成していった Hurston にとって、両親と自分の宗教観や民族観もまた対立要素でありながら、共有される価値観なのである。

結び

Hurston の両親の人生がモデルとなっている *Jonah's Gourd Vine* が象徴するのは、自分のルーツであり、自分の人生の一部ではあるが、自分そのものではない価値観に対する人間の認識のスタンスの一つである。自分に与えられた “gourd vine” を損ない、変化を求めないわけにはいかない John の生き方は、彼の短絡さや弱さを表しているようでいて実のところそれ以上に普遍的な人間の成長物語を意味し、そこには環境や他者から与えられた価値観を再評価していく過程こそが人間の自己実現にとって不可避であるとのメッセージが読み取れる。さらにこのメッセージは、この作品でも Hurston の自伝 *Dust Tracks on a Road* でも描かれる、母の死に際して枕を取り除けたり鏡を覆ったりしないでくれと言う母の願いを、慣習を表象する周囲の大人たちに阻止されて叶えることができなかった Hurston 自身の無念な気持ちが描かれるシーンに凝縮されている。特に鏡を覆う慣習は *Mules and Men* においてもそのルーツが説明される。物語中の子 Isis に

表象される Hurston は、彼女がおかれた時代と慣習、民族性に抗い、それを再評価して自分の意志を通す必要を感じながらも、彼女を育んだ価値観を完全に離脱することができないのである。

John の人生の物語が示唆するものは、Hurston にとってそこに自らのルーツを認めながらも反発を伴う、民族性に対する愛と考えられる。つまりアフリカ系アメリカ人であることが仲間意識を生むとも限らず、同じ民族内での対立が生じることもあり、黒人の味方が黒人であるとも限らないことを Hurston は体験している。John が身を置く家庭や教会、彼の時代に抱かれた人種観は、Hurston にとってその人生の根底にある価値観であるとともに Hurston が人生を歩みながら再評価すべきものである。この作品においては、John が自らの民族性に対する愛、反発心、責任感といった意識を抱く文脈の中で、普遍的な人間の成長物語をも同時に追求しようとする Hurston の独自の文学的視点が読み取れるのである。

本稿は、九州アメリカ文学会第66回大会（2021年5月9日）にてオンライン発表をした原稿に大幅な加筆修正を施したものである。

註

- 1 Rita Dove はこの作品の Foreword にて、“What is striking, however, is that this young woman did not make one of the major mistakes of first novelists — sticking too faithfully to the ‘true story’ — but knew how to fashion of her parents’ lives a tale of compelling pathos and majesty.” (*Jonah's Gourd Vine* xiv) と述べており、Hurston が両親の実話に執着しすぎることなく、新たな独自の物語を創出している点を評価している。
- 2 Samuel Willard Crompton もまた、“This was thoroughly a tale of black America.” (53) と指摘する。また、Stephanie Li は、Hurston が人種問題ではなく普遍的な人間の問題を扱っていることについて、“While Hurston's primary characters would of course be black, she had no interest in focusing on the problem of race.” (95) と指摘する。

- 3 Hemenway によると “It is instructive to note that the sermon was taken almost verbatim from Hurston’s field notes ... It was collected from the Reverend C. C. Lovelace of Eau Gallie, Florida, on May 3, 1929” (197) と記されている。

引用文献

- Adair, Thelma Davidson. “Jesus Christ, the Same Yesterday, Today — Forever,” *Black Preaching: Select Sermons in the Presbyterian Tradition*, edited by Robert T. Newbold Jr., Geneva Press, 1977, pp.13-14.
- Bradford Jr, Henry. “It’s Either Up or Down,” *Black Preaching: Select Sermons in the Presbyterian Tradition*, edited by Robert T. Newbold Jr., Geneva Press, 1977, pp.67-70.
- Crompton, Samuel Willard., and Charlotte Etinde. *Zora Neale Hurston: Author and Anthropologist*. Enslow Publishing, 2020.
- Frazier, E. Franklin. *The Negro Church in America*. Schocken Books, 1974.
- Hemenway, Robert E. *Zora Neale Hurston: A Literary Biography*. U of Illinois P, 1980.
- Hurston, Zora Neale. *Their Eyes Were Watching God*. HarperCollins Publishers, 2010.
- , “Dust Tracks on a Road,” *Zora Neale Hurston: Folklore, Memoirs, and Other Writings*, edited by Cheryl A. Wall, The Library of America, 1995, pp.557-808.
- , *Jonah’s Gourd Vine*. HarperPerennial, 1990.
- , “Mules and Men,” *Zora Neale Hurston: Folklore, Memoirs, and Other Writings*, edited by Cheryl A. Wall, The Library of America, 1995, pp.1-267.
- , “Tell My Horse,” *Zora Neale Hurston: Folklore, Memoirs, and Other Writings*, edited by Cheryl A. Wall, The Library of America, 1995, pp.269-555.
- Li, Stephanie. *Zora Neale Hurston: A Life in American History*. Santa Barbara, ABC-CLIO, 2020.
- Mercer, William S. “Top Value Stamp,” *Black Preaching: Select Sermons in the Presbyterian Tradition*, edited by Robert T. Newbold Jr., Geneva Press, 1977, pp.41-43.
- Rooks, Shelby. “Sins of the Fathers,” *Black Preaching: Select Sermons in*

the Presbyterian Tradition, edited by Robert T. Newbold Jr., Geneva Press, 1977, pp.145-148.